

インクルーシブ教育と ICF

企画者	徳永亜希雄	（横浜国立大学）
司会者	徳永亜希雄	（横浜国立大学）
話題提供者	齊藤博之	（山形県立ゆきわり養護学校）
	達 直美	（東京都立光明学園）
	西村修一	（前・栃木県立岡本特別支援学校）
指定討論者	山元 薫	（静岡大学）
	田中浩二	（東京成徳短期大学）

KEY WORDS: インクルーシブ教育 ICF 活用

【企画趣旨】

ICF（国際生活機能分類）は、様々な分野で活用が進められてきたが、我々は主に特別支援教育の文脈での活用について、本学会での自主シンポジウム等を通して検討を重ねてきた。関連した ICF についての言及としては、特別支援学校学習指導要領解説での障害による学習上又は生活上の困難さの捉えとの関連、個別的教育支援計画における関係者との情報共有、中教審分科会での合理的配慮との関連、教育支援資料での障害の捉え方等の関連等がある。

それらの多くは、ICF の概念的枠組みの活用についてであるが、我々は ICF 及びその児童版の ICF-CY の分類項目や評価点も含め、ICF の様々な側面から活用可能性や効果等について検討を重ねてきた。ここ数年は、合理的配慮に焦点を当てた取組を行い、活用可能性や課題等が明らかになって来た。そこで、本大会では、より幅広く「インクルーシブ教育と ICF」とタイトルをあらため、様々な視座から検討を深めたい。

【話題提供の趣旨】

1. 育成すべき資質・能力と ICF（齊藤）

新しい時代に必要となる資質・能力の考え方は、「コンテンツからコンピテンシーへ」という国際的なトレンドとなっている。日本の学習指導要領は、この資質・能力を『何を理解しているか、何ができるようになるか（生きて働く「知識・技能」の習得）』、『理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）』、『どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）』の三つの柱として再整理した。これら三つの視点・観点は、目標設定と評価に直接的に結びつくものであることは間違いない。これまでの ICF 活用の動向から、まずは、目標設定並びに学習評価の部分で、育成すべき資質・能力と ICF の関係を考察していきたい。そして、「学びに向かう力・人間性等」の非認知能力の涵養にかかわる部分での ICF との関係についても考えていきたい。

2. キャリア教育と ICF（達）

ICF は、前述のとおり、個々の困難について環境を含めた多面的・総合的に実態把握を適切に行い、指導・支援の在り方を検討するための視点として示された。一方、キャリア教育は、高等部の学習指導要領総則（2009）の「職業教育に関して配慮すべき事項」及び「教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項」において、職業教育や進路指導、教育課程の見直しと充実を図る視点からその推進が示された。両者の共通する視点は、本人の自己実現や社会参加のために適切な指導と必要な支援の方向性を共通理解するところにあると考える。筆者は、長年、学齢期後の生活をより豊かにするためにキャリア教育の中核は「本人の願い」と捉え PATH や ICF を方向性や支援策を具現化するためのツールとして活用することで、学校のキャリア教育全体計画が作成され、教職員全

体で理念は共有されてきた。一方、キャリア教育の視点によって時間軸を中心に「縦」をつなぎ、ICF の視点によって空間軸を中心に環境を整え、学校内外の関係者と支援方策等を連携するといった「横」をつなぐことは課題として残る。このことの背景などを考えながら ICF の更なる活用推進について意見交換を行いたい。

3. ICF と主観的障害（西村）

主観的体験によって生じる心理的問題（主観的障害）は活動と参加と参加を妨げる原因となり、インクルーシブ教育推進上のしばしば大きな問題となる。この心理的問題（主観的障害）の多くは、しばしば教育現場では二次障害として論じられる。ところで ICF は機能障害や困難さ等に関する評価点に基づく客観的障害の評価であり、主観的次元は別次元にあるとしたかつての上田の指摘（1981）への固着や、我が国で行われてきた概念図記入による評価の手法は個々の主観を評価に踏まえる考えの行き詰まりを生んできた。しかし ICF の心身機能：精神機能のカテゴリーには人の心の内に対応する分類項目が多々あり、主観を踏まえた記述評価をセットに評価すれば個々の主観的課題（障害）の評価が可能となる（例えば b1266 確信（評価点 2（中等度の機能障害））、記述評価：自信や自己を肯定する感情を生み出す精神機能）の評価において「読み書きに対する自信を喪失し自己否定の感情が高まっている。」等。）。活動と参加、環境因子においても主観を踏まえた評価が可能である。国外ではそうした評価が一部でなされている。本提案では特に主観的障害に焦点を当てた ICF による評価を紹介する。

【指定討論の趣旨】

1. これからの時代の ICF 活用（山元）

ニューノーマル時代を迎え、また、多様性をインクルードしていく時代にあって、教育はどのように子供たちを捉えていけばよいのか？改めて考える時期であると感じている。それらの動きと各話題提供の内容を踏まえ、「学習評価」への ICF の活用、生涯にわたって豊かに生きるための ICF の活用、精神疾患等により客観的及び主観的障害の状態の著しい変化がある中で合理的配慮提供における ICF 等の可能性について協議を行いたい。

2. 切れ目ない支援と ICF（田中）

これまで、高齢者への支援、保育の段階から学校教育への継続的な支援等における ICF の活用として主に分類項目の活用に焦点を当てながら検討を進めてきた。現在、厚労科研「地域包括ケアシステムにおいて活用可能な国際生活機能分類（ICF）による多領域にまたがる評価手法の確立に資する研究」に企画者と共に協力し、特別な支援が必要な子供への支援への活用について検討を進めている。それらで得られた知見等を踏まえ、指定討論を行いたい。

(TOKUNAGA Akio, SAITO Hiroyuki, TSUJI Naomi, NISHIMURA Shuichi, YAMOMOTO Kaoru, TANAKA Koji)